道路監督員と業務上過失致死傷罪

道路の新設改築を爲すことは道路管理者たる行政廳の權限に屬し、此權限行使の爲に道路職員を設けて、事實上の行爲を執行せしめて居るのであるが、是等職員が工事を監督する場合に方つて、過失に依つて他人に損害又は加害を及ぼしたる場合の民事上又は刑事上の責任は、道路職員の負擔すべきものであるか、又は道路管理者の負擔すべきものであるかは、大に論議すべき問題である、之に關しては後日稿を更めて研究の顯未を發表する積りであるが、最近名古屋地方裁判所岡崎支部は、道路工事の監督員が監督上加ふべき注意を怠り、其の工事請負に從事したる人夫を致死傷したる爲、其の工事監督員に對し有罪の豫審決定を與へた、其の豫審終結決定は左の左通である

理由（大正十二年十二月二十八日　名古屋地方裁判所岡崎支部　豫審判事　世古件逸郎）

曩ニ舊制愛知縣八名郡及同縣南設樂郡ニテハ郡事業トシテ八名郡大野町ヨリ南設樂郡長篠村地內私設鳳來寺鐵道三河大野驛ニ至ル舊郡道中ノ一部（右三河大野驛ヨリ東方約三十六間）ヲ貫流スル三輪川（通稱板敷川）上ニ全長二百呎幅員十二呎ノアーチ形鐵橋ヲ架設スルコトトナリ、大正十一年十一月其工ヲ起シ、大正十二年三月末日舊郡制廢止迄ニ竣功セシムル豫定ナリシトコロ、同年二月十一日及三月十二日ニ於ケル兩度ノ出水ノ爲メ、工事ニ蹉跌ヲ來シ遲延スルニ止ムナキニ至リ、其後舊郡制廢止ニ依リ、同年四月中前記郡道ハ縣道ニ編入セラレ該架橋工事モ亦愛知縣ノ事業ニ移管セラルヽコトヽナリタリ、而シテ被告庫次ハ右工事起工以來初メハ八名郡道路技手トシテ郡制廢止後ハ愛知縣土木兼道路技手トシテ、夫々所屬官廳ヨリ現ニ監督ヲ命セラレ該工事ノ現場ニ出張シテ工事カ設計書通リ正確且安全ニ施行セラルヽヤ否ヤニ付、全般ノ指揮監督ヲ爲シ、被告善作ハ同年二月中旬頃ヨリ右工事ノ請負人鈴木澤太郎ノ代理トシテ其現場ニアリテ工事施行ニ付諸般ノ作業ヲ萬遺漏ナキ樣指揮監督シ、被告房吉ハ同年同月上旬頃ヨリ鳶主任トシテ部下ヲ指揮監督シ又部下ト共ニ鳶ノ作業ニ從事シ以テ右工事ノ進捗ヲ圖リ來リ同年四月十九日ガーター（拱助）ノ組立ニ着手シ、同月二十九日ニ其假組立ヲ終レリ、然レドモ該工事ニハ前記三月十二日ノ出水ノ爲メニ其大野町側拱助端橋臺ニ取付ケアリタル「アンカーボルト」ノ設計ヲ變更シテ修理シタル結果、其個所ニ於テ不備ノ點ヲ生ジ又拱助完成ニ至ルマデ一時之ヲ支持スベキ作用

ヲ爲ス足場支持柱ノ一部ニ比較的抵抗力弱キ橋床支持用ノ「ポスト」ヲ流用セル等ノ不適當ナル個所アリタルノミナラズ、同年五月五日ニアリテハ左右兩側拱助ノ各繼手ニ於ケル鋲打本締作業及拱助ノ動搖ヲ防グベキ振止メ取付作業ハ共ニ未完了ニシテ未ダ拱助上ニ「ポスト」「ストリンガー」等ノ取付ヲ爲スベキ順序ニアラザルニ、工事ヲ急ギタル結果大部分其假取付ヲ爲シアリ、又當時拱助ト直接之ヲ支持スベキ支持臺トノ絶縁ヲ防止スベキ楔ノ調節ニ於テ充分ナラサルモノアリ、加フルニ大野驛側ハ拱助端附近ノ支持臺ヲ減ジ僅ニ一本ノ杉丸太ニ依リテ該拱助約四十呎ヲ支持セシムルガ如キ方法ヲ講ジアリタル爲メ、從テ拱助全體極メテ不安定ニシテ且動搖シ易ク危險ナル狀態ニアリシヲ以テ、苟モ之ニ横力ヲ加フルガ如キ作業ハ之ヲ避ケザルベカラズ、然ルニ被告房吉ハ被告善作ト相謀リテ同日午後十二時半頃ヨリ前記足場支柱ニ流用セル「ポスト」ヲ拱助上ニ取付クル必要上之ヲ足場ヨリ取外サムトシテ他ニ拱助ニ力ヲ加ヘズシテ取外スベキ適當ノ方法アリタルニ拘ラズ之ヲ選バズ、共ニ業務上必要ナル注意ヲ怠リ自ラ部下ヲ指揮シテ前示ノ如キ不完全不安定ノ狀態ニアリタル拱助ノ大野驛側第二繼手附近ニ左右各一個ノ「チエンブロツク」ヲ裝置シ「ポスト」取外シ作業ヲ爲シタル爲メ前記杉丸太ノ折斷ヲ來シ衝動的ニ拱助ニ集中荷重ヲ作用セシムルノ結果ヲ生ゼシメ爲ニ拱助ハ動搖ヲ發シ重心ヲ失ヒテ傾斜シ、同日午後三時稍前傾俄然河中ノ岩石上ニ墜落スルニ至レリ而シテ當時該拱助及其附近ニ於テ夫々作業中ナリシ鳶職鍛治職等ノ中阿部勇作早川大二郎荒川淺一西村彌一比企正七ノ五名ハ何レモ拱助ト共ニ墜落シテ或ハ頭部ノ打撲ニ因ル腦震盪ノ爲メ若クハ頭蓋骨々折又ハ腦髓ノ損傷ヲ受ケテ死亡シ池羽利一郎ハ右助骨其他六個所ニ約三個月梶村岩吉ハ右上膊部其他ニ約一週間井戸常太郎ハ右耳翼其他ニ約二週間鈴木惣平ハ左顱項部ニ約二週間羽賀末造ハ右腓骨其他ニ約二個月瀧澤三太郎ハ右下顎其他ニ約一週間安井米次郎ハ右前頭部其他ニ約二週間ノ夫々治療ヲ要スル重輕傷ヲ蒙リタリ然而シテ被告庫次ハ被告房吉等ガ前記ノ如キ危險ナル狀態ニ於テ「ポスト」取外シノ爲メ拱助ニ「チエンブロツク」ノ取付作業ヲ爲シ居リタルヲ現認シナガラ監督上ノ注意ヲ怠リ之ヲ中止セシメズシテ同人等ノ爲スニ任セ居リタルモノナリ

以上ノ事實ハ其證憑十分ニシテ右被告ノ所爲ハ各刑法第二百十一條ニ該當シ各同法第五十四條第一項前段を適用處斷スベキ犯罪ナリト思料スルヲ以テ刑事訴訟法第百六十七條第一項ニ則リ主文ノ如ク決定ス